



「ツイスター」

キイ・デイヴィッドソン著、

山本民雄・室伏洋子・

佐藤陽子他訳、

株式会社竹書房、1996年7月、

A 5版、333頁、600円

あとがきによると、本書は「サンフランシスコ・イグザミネー」のライターを勤め、アメリカで最高とされる科学記事に関する2つの賞を受賞している著者による原題“Twister: The Sciences of the Tornadoes and the Making of an Adventure Movie”の邦訳である。

ある日の夕方、木村龍治先生の本棚に無造作に並べてある本書を見つけた。「ツイスター」というと、昨年我が国でも公開されたスティーブン・スピルバーグ製作の映画を思い出す。私も野次馬根性を出して映画館に足を踏み入れ、そのストーリーのお粗末さと科学的な現実性の欠如に大いに落胆した1人である。案の上、本書のカラー表紙やカラー口絵には、映画のシーンや製作風景がふんだんに使われている。しかも、竹書房というと、時折新聞紙面を賑わしている、いわくつきの出版社ではないか。どうせ読むには値しない本だろうと思いつつも、木村先生から帰宅時にお借りして鞆にほうりこんだ。

本書の構成は以下のとおりである。

序章

第1章 ゼロ地点

第2章 崩壊

第3章 怪奇なるアメリカ

第4章 殺られる前に殺れ

第5章 つむじ風のなかに

第6章 路上

第7章 白死病と地球温暖化

第8章 竜巻を利用する

第9章 未知の世界

終章

各章の表題を見てもその内容はさっぱりわからない。きつと科学的に見れば誤りばかりの通俗的な内容だろうと最初から決めつけて電車の中で読み始めて驚いた。「ツイスター」の映画の製作に関わる記述は全333

ページのうち18頁の序章と19頁の終章にあるのみで、全体の約90%は竜巻研究の歴史と最新の竜巻研究に関する優れたノン・フィクションではないか。

第1章は、トルネード・チェイシングと呼ばれる竜巻追跡の話である。1994年、1995年夏、オクラホマ州を中心にして行われた VORTEX (Verification of the Origins of Rotation in Tornadoes Experiment; 竜巻の回転の源を突き止める観測実験) を中心に、竜巻追跡の苦労と喜びが紹介される。ボブ・デイビス=ジョーンズ、ジェリー・ストラーカ、ジョス・ワーマン、ジョン・スノウ、エリック・ラスムッセンなど第1線の研究者のエピソードが時には本人の写真入りで次々と登場する。映画「ツイスター」での無謀な竜巻へのアプローチとは異なり、VORTEX の観測責任者のラスムッセンがどれだけ危険対策に神経を使ったかが描かれている。VORTEX により設置された気象測器の真上を竜巻が通り、貴重な竜巻の気象データが得られたことも紹介される。

第2章では竜巻の被害の悲惨さと竜巻による飛散物の調査学が紹介される。第3章はアメリカに開拓者が移住してから1956年頃までの、竜巻研究を含めた人間と竜巻との関わり合いの話である。竜巻はヨーロッパから移り住んできた人々に畏敬の念を抱かせると共に、様々な怪奇な現象を引き起こしてきた。それは、やがて竜巻のメカニズムを理解しようとする試みに発展する。

第4章は竜巻制御の夢と挫折、竜巻の電気起源説に関する論戦、そしてシカゴ大学の藤田哲也博士による藤田スケールと竜巻の中の吸い込み渦発見の話である。第5章は竜巻の構造を探る苦労話で、水上竜巻に飛行機で突入したり、陸上竜巻に飛行機からロケットを打ち込んだり、科学者の悪戦苦闘の様子が描かれる。

第6章ではアマチュアの竜巻追跡家の活動が紹介される。「確かに竜巻は息を飲むほどに美しい。しかしそれは何も破壊が美しいわけではなく、竜巻そのものの美しさなんだ。・・・略・・・竜巻の前では、けちなこと、卑小なことはすべてどこかけし飛んでしまう。そして、ただうっとりと眺める・・・」と話す人々の努力が、竜巻研究の上で多くの貴重な映像を生み出してきた。

第7章では「白死病」(農民が雹につけたあだ名)や竜巻の発生数と気候変動の関係についてのいくつかの説が紹介される。第8章では、竜巻を人工的に作り出してそのエネルギーを利用する試みについて短く触れ

である。

第9章では竜巻予報の可能性を探る。しばらく前まではメソ低気圧の約半数が竜巻を発生させると考えられていたが、最近ではたかだか30%しか竜巻を発生させないと考えられていることが紹介され、竜巻警報の難しさが指摘される。最後は「これから10年の間にビデオカメラを持った誰かがあの未知の世界への旅から生還してもぼくは驚かないね」というアマチュア竜巻追跡家アントン・サイモンの言葉で締めくくられる。「未知の世界」とはもちろん竜巻の中であるが、この言葉は竜巻研究の現状をも2重写しにしている。VORTEXによる観測成果や数値シミュレーションの発達

により、この10年で竜巻のメカニズムの解明は大いに進むであろう。

本書は大衆向けに書かれてはいるが、竜巻に興味を持つアマチュアの方から専門家に至るまで十分楽しめる内容である。通俗書に見られる科学的な事実の誤りも少なく、邦訳もほぼ満足できる出来映えである。特に映画「ツイスター」を見てがっかりした方には是非読んでいただきたい。竜巻研究に関わってきた人々の「本当の」ドラマが読者をきっと惹きつけることであろう。

(東京大学海洋研究所 新野 宏)



平成9年度大槌シンポジウム 「日本周辺の北西太平洋を中心とするグローバルな大気海洋相互作用」 開催のお知らせおよび講演者募集

下記に示した本シンポジウムは1989年以来毎年一回、岩手県大槌市にある東京大学海洋研究所大槌臨海海洋センターで、今までの研究のレビュー、新しい研究内容の発表、今後の研究計画などを中心に大気と海洋の広い分野にわたり議論と討論を行うものです。今回は、『やませ』や『親潮の異常南下』さらには『ENSO』や『アジアモンスーン』などとのテレコネクション現象などの空間的な問題と最近注目されている十年スケールのグローバルな時間変化などを考慮し、大気と海洋の変化をまとめて議論しようというのが本シンポジウムの主たる目的です。

シンポジウムの講演は原則として一人20分程度を予定しております。興味をもたれた方は講演の有無に関わらず奮ってご参加ください。

本シンポジウム終了直後の11月18日(火)～19日(水)に北海道区水産研究所の川崎康寛博士をコンビナーと

するシンポジウム『北太平洋西部亜寒帯循環域の変動と力学』が開催されます。続けて参加することが可能です。

シンポジウム参加及び講演の申込みは下記にご連絡いただければ幸いです。

開催期日：1997年11月17日(月)午後～11月18日(火)

開催場所：東京大学海洋研究所大槌臨海海洋センター
講堂

講演・参加申込み期限：1997年9月30日

参加・講演申込み先：

〒514 津市上浜町1515

三重大学生物資源学部海洋環境学講座

関根義彦

TEL：0592-31-9550

FAX：0592-31-9540

E-mail：sekine.@bio.mie-u.ac.jp